書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

維新の思想史

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

津田左右吉

維新の思想史

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

本書について（刊行者の辞）

本書『維新の思想史』は、「厳密な古典批判により科学的な日本・東洋の古代史・思想史研究を開拓」（『広辞苑』）した津田左右吉（一八七三年生、一九六一年歿）が晩年に取り組んだ、幕末維新期の思想状況に関する一連の研究論文を集めたものである。

津田左右吉の研究業績は全集版で三十三巻（各巻五、六百ページ）に及ぶもので、その著述量は近代日本の思想史研究者としては群を抜いている。『文学に現はれたる我が国民思想の研究』（四巻、改訂版『文学に現はれたる国民思想の研究』）を代表作とする津田の研究対象は、記紀をはじめ、儒家や道家などの中国思想、仏教、神道などと多岐にわたっているが、それらはいずれも「国民思想」史研究の一環と見るべきものである。

津田がそのライフワーク『……国民思想の研究』を軸とする思想史研究でとらえようとしている「思想」とは、読書による知識や思弁による概念ではなく、人々の実生活とともにあるものである。本書に収めた論文のなかでは、そうした「思想」のありようが「あたま」と「気分」との区別において問題化されている。「あたま」は急にきりかえることができるが「気分」はそうはいかない――そういう「気分」としての「思想」をとらえうるものとして津田は『……国民思想の研究』において「文学」を材料に選んだのである。（「著者の目的は思想の研究であるが、其の材料を主として文学に採つたのは、国民の心生活、国民

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

の思想の最も適切な表現を文学に於いて認めることが出来ると思ふのと、今一つは著者の平素の嗜好が茲にあるのとの故である。」初版『文学に現はれたる我が国民思想の研究』第一巻「例言」。）この「思想」について津田は次のようにも述べている。「『思想』といふ語は何等かの形で思惟せられたものをさすのが普通の用ゐかたであらうが、この書で考へようとしたことは、それのみではなく、生活気分とか生活意欲とかいふべきことをも含み、むしろその方に重点を置いたばあいが少なくないから、『国民思想の研究』といふ名は、この書にはふさはしからぬ感じがする。しかしかういふ意義で国民の心生活の全体を示す適当の語が無いやうに思はれたから、しばらくこの名を用ゐることにしたのである。」（『……国民思想の研究』改訂版第一巻「まへがき」）。津田の「思想」についての関心は、或る「思想」がどんな実生活から生じて、それが実生活をどのように動かしたかという点にあるということができるだろう。

四巻本『……国民思想の研究』の構成は、「貴族文学の時代」「武士文学の時代」「平民文学の時代・上」「平民文学の時代・中」となっているが、執筆の動機としては、明治維新に対する関心が先ずあったと津田自身が語っている（岩波文庫『津田左右吉歴史論集』ほか所収「学究生活五十年」）。津田の思想史研究は、明治維新期に対する関心を出発点とし、それを歴史的に深く理解するために記紀の時代からの日本思想を跡づけ、さらに日本思想の特色を明らかにするものとして、日本思想の一つの淵源である中国思想を考察し、遂に（再び）明治維新期の研究に至り着いたものである。

『……国民思想の研究』は一九一六年から一九二一年にかけて四巻が公刊された。津田は、引き続いて第五巻「平民文学の時代・下」を刊行するつもりであったが、「出版社がその事業をやめ、また震災のために上記四巻の紙型が焼けたのと、わたくし自身が他の方面のしごと、具体的にいふとシナ思想を

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

考へること、に力を入れるようになったのと、これらの事情のために今までまだ書かないまゝになつてゐる。」と述べている（『……国民思想の研究』改訂版第一巻「まへがき」）。

昭和のはじめころには岩波書店から同書の再刊の相談を受けたが、補訂の余裕がなかったためにその実行は晩年になったという。改訂版は一九五一年から一九五五年にかけて同じく四巻構成で刊行された。改訂版で書名から「我が」が削られたのは、「さしたる意味があつてのことではなく、それが無くても、この書が我が日本の国民思想を取り扱つたものであることは、おのづから知られるのと、実際、一般にはこの語を除いて呼びならはされてゐるのと、また改訂版であることが、かうすることによつてすぐわかるのと、これらの理由からである。」と、その「まへがき」に記されている。（なお、岩波文庫版で復刻されているのは初版のほうである。）

同書改訂版第四巻の「まへがき」（左記引用）は、本書に収めた幕末維新期の思想史研究が津田の研究史においてどんな位置を占めているかを語っている。

この一巻は大正十（一九二一）年に公にした「平民文学の時代　中」の改訂版である。昭和二十三年の秋に旧著の補訂をはじめてから、今年の春の末までかゝつて、ともかくも一とほり既出の四巻に手を入れることができた。それを読みかへしてみると、さらに補訂を加へたいことが少なくないので、しごとをいそぎすぎたかと思はれる憾みもあるが、今のわたくしが次に出すべき第五巻を新に書かうとするためには、これもしかたの無いことであつた。その一巻を書き了へるには、少くとも二三年または三四年の歳月を要するであらうが、「国民思想の研究」でわたくしの考へようとし

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

たこと書かうとしたことは、実は、維新前後の三四十年間の思想界の情勢に対する観察を内容とするこの最後の一巻に、その重点を置いてゐたのである。長い歴史によって次第に独自の文化とそれに内在する思想とを造り出して来たわれ〳〵日本国民が、全く歴史を異にするヨウロッパの文化と思想とに新しく接して、それを如何に処理せんとしたか、さうしてその効果が如何に現はれその得失が如何なるところにあったか、またそれがそれから後の日本の進むべき針路をどう向けてゆき、世界の文化に対して執るべき日本人の態度をどう導いてゆくことになつたか。これらの問題についての私見を述べようとするのが、この一巻の意図である。これはこの書の著作を企てた時の最初の構想に含まれてゐたことでありながら、四十年近くも実現せられずに過ぎて来たのを、今いそいでそれにとりかゝらうとするのは、わたくし自身にとつては、別にいさゝかの理由が無いでもない。明治の初年に或る人が詠んだといふ「夜は寒くなりまさるなりからころもうつに心のいそがるゝかな」の一首が、それにつけても思ひ出される。第四巻の巻首にかゝることを書きつけるのも、またそのためである。

（末尾の謝辞を省略。傍点は引用者による。）

津田がこの第五巻の実現を志して仕事を進めていたことは、第五巻の序論部分にあたる「文化の大勢一・二」が遺稿として存在していることからも明らかであるが（『……国民思想の研究』各篇は、それぞれ「文化の大勢」という序論部分をもっている）、結局、第五巻として刊行することはできなかった。人生に残された時間がそれを許さなかったのである。また本書が収める各論文を読めばそう感じられるだろうように、それらを「文学に現はれたる」思想の研究として括ることには無理があったのかも知れない。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

以上簡単に事情を紹介したように、津田の長期にわたる思想史研究の動機となった幕末維新期に関する問題意識は、人生の最後においていくつかの論文として実を結んだのである。

＊

本書収録各論文の初出は次の通り。

「幕末における政府とそれに対する反動勢力」『心』一九五七年三月～四月
「幕末時代の政治道徳」『心』一九五九年三月・五月
「維新前後における道徳生活の問題」『心』一九六〇年七月～九月
「君臣関係を基礎とする道義観念」『心』一九五八年七月
「明治の新政府における旧幕臣の去就」『心』一九五六年一月
「維新政府の宣伝政策」『心』一九五八年十月～十二月
「明治憲法の成立まで」『心』一九五九年六月・十月
「近代日本における西洋の思想の移植」『フィロソフィア』一九五二年十月
「福沢・西・田口――その思想に関する一考察――」『福沢研究』一九五一年十一月

附記　本書収録の各論文において日本の固有名詞が片仮名で表記されているが、津田左右吉はある時期からそのような書き方をするようになった。その思想的な事情については、「漢字と日本文化」という

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

論考（『津田左右吉セレクション2　日本文化と外来思想』書肆心水刊、ほか所収）などに示されている。

二〇一三年　書肆心水

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

維新の思想史　目次

幕末における政府とそれに対する反動勢力……15
幕末時代の政治道徳……42
維新前後における道徳生活の問題……82
君臣関係を基礎とする道義観念……123
明治の新政府における旧幕臣の去就……136
維新政府の宣伝政策……149
明治憲法の成立まで……191
近代日本における西洋の思想の移植……270
福沢・西・田口――その思想に関する一考察――……301

SAMPLE
Shosni-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

維新の思想史

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

凡例

一、底本には岩波書店版津田左右吉全集を使用した。

一、本書では全体に新漢字標準字体で表記し、引用以外は新仮名遣いで表記した。片仮名表記においては長音符号を使いうる場合は長音符号に置き換えた（著者特有の表記法として日本の固有名詞を漢字表記せず片仮名表記しているものは除く）。

一、踊り字（繰り返し符号）は「々」のみを使用した（引用部分は除く）。

一、読み仮名ルビを多少補った（引用部分でも読み仮名ルビは新仮名遣いで補った）。

一、行内の二行割註は本書刊行書によるものである。

一、底本では出版著作物名も『』ではなく「」で括られているが、これはそのままに表記した。また「」で括られていない出版著作物名もあるが、これもそのままに表記した。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

幕末における政府とそれに対する反動勢力

一

わたくしは昭和三十一年の新年号の「心」に載せた小稿「明治の新政府における旧幕臣の去就」（本書収録）の結末において、他日機を見てカツ・アワ（勝安房）の人物とその行動とに関する卑見を述べてみたいといっておいた。わたくしの考えは、日本の国家経営の一大転換期に立っていたいわゆる幕末の十余年間において、当時の日本の政府であった幕府の当局者が、日本の国家の進んでゆく針路を如何なる方向にとらせようとして努力したか、そうしてそれがどれだけの効果を収めその後の日本にどういうはたらきをしたか、を見ると共に、幕府のこの方針に対立して断えずそれを妨害する力、歴史的意義においては一種の反動勢力、があったこと、また、後に維新の元勲などといわれた人物の思想や行動もこの反動的勢力に属するものであって、それが明治の日本にいろいろの暗いかげを投げかけたことを、明かにし、カツをその間に立たせてみようとしたのである。カツをあまりにも大きく見せすぎることにもなるし、いまさら百年も前の幕末時代を回顧することに何ほどの意味があるかと思われるかも知れぬが、わ

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

たくし自身には、これは興味の深い問題なのである。

これまでの幕府の政治の根幹は、治安を維持することによってトクガワ（徳川）家の権力を固めるところにあった。いわゆる禁教の政策だけは、世界に対して日本の国家の独立と平和とを確立するためのものであったが、それすらも上記の意味での治安の維持とからみあっていた。ところが、嘉永・安政の交に至り、アメリカ及びヨーロッパ諸国の開国の要求に接し、親しく列国と交渉を開くようになると、交渉を重ねるそのことによって、幕府の当局者は初めて幕府が世界における独立国としての日本の政府であることを新しく認識し、おのれらが世界における日本人であることの明かな自覚に導かれた。幕府の政治はこれまでの如くトクガワ家の権力を維持しまたはそれを固めることにあるのではなく、世界列国に対して独立国日本を立派にうち立ててゆくこと、列国の一員として進んでその間に立ち交り、彼等と共に盛んな活動をしてゆくことである、という根本方針が、かくして決定せられた。アベ（阿部）・ホッタ（堀田）の二閣老によって指導せられ、新たに登用せられた幾多の優秀なる事務官によって翼賛せられ助成せられた幕府の開国政策は、この根本方針から割り出されたものであり、それによって幕府政治の一大転換が行われたのである。列国との通商条約の締結及びその実行としての貿易港の開設、批准交換使のアメリカ派遣、オランダから教師を招聘して行われた海軍伝習、日本の海軍軍人がその伝習の開始から三、四年の短日月を経たのみでありながら、僅々百馬力の小艦咸臨丸を運転してアメリカに渡航し、日本の国旗を初めて海外に翻したこと、西洋の学術の研究と教授とのための国立の学校たる洋書調所の開設、その後における留学生のヨーロッパ派遣、或はまた蝦夷地の警備及び拓殖、小笠原島の所属決定、数次にわたってのヨーロッパへの使節の派遣、後には在外公使の任命及び公使館の設置、将

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

軍の特派大使のヨーロッパ列国の宮廷歴訪、フランスに開かれた世界博覧会への参加、なお幕府の最後の企画としてのヨコスカ（横須賀）造船所の開設、実現はできなかったけれども朝鮮の開国を勧誘しようとした新しい外交政策、およそこれらの事業は、上記の如き反動勢力の執拗なる妨害のために、或は態度の明徹を欠き或は行動の渋滞を来たしたことが少なくないにかかわらず、大観すれば、幕府が始終一貫して最初に決定した国策を遂行したことを示すものである。この国策は、要約していうと、日本が初めて外国と正常な外交関係をもつようになったことと、ヨーロッパ及びアメリカの文明を学びとろうとしたことがあって、その外交関係は昔からのシナに対するのとは全く違っていることが注意せられねばならぬ。自国を中国とし他国を夷狄とするようなシナに対しては、正常な外交関係は成りたたず、力に任せて他を圧服せんとするような態度をとったトヨトミ・ヒデヨシ（豊臣秀吉）の行動もまた外交ではない。日本が他国と外交関係を生じたのは、トクガワ幕府のこの時のしごとに始まるのである。

ただ外に対して国家の独立を保つには内においてその統一を堅固にすることが必要であるのに、戦国時代の遺習による世襲的封建諸侯の存在はそれを妨げるし、新しい国策の遂行には人材を要することが多いのに、世禄を食む武士によってすべての吏僚が構成せられ、そうしてそれが一般社会組織の根幹ともなっている従来の制度においては、このことが困難である。この封建の政治制度と武士本位の社会組織とは、トクガワ家の権力の固定をその政策の根本としていた旧来の幕府にとっては、極めて自然でまた極めて重要なものであり、事実それによって幕府が存立し得たのであるが、国策に一大転換を行った以上、それをそのまま維持するのでは、新国策が行い得られぬ。第一、政治的勢力の上からも外国貿易に関する経済上の利益の点からも、封建諸侯が幕府の新国策を賛助するかどうかが疑問であり、また武

SAMPLE
Shosha_Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

士の制度は当時において焦眉の急とせられていた兵制の整備にすら大なる障害を与えることになる。この二つの制度は制度自身がそれぞれに大なる矛盾を抱いているのであって、多年にわたる幕府の政弊もそれによるところが多かったが、このことは別の問題としても、さし当ってここにいったような困難がある。しかしそれを改めることは幕府の根幹をゆるがすものであるから、当時の幕府の当局者も軽々しくそれに手を触れるわけにはゆかぬ。そこで或は一種の政治道徳観から、封建諸侯をして幕府の国策に親しませることによって彼等を思想的に統一せんことを試み、或は人知れぬまに徐々に直参武士の生活と目前の要求とを調和させようとした。対外の問題について諸侯の意見を徴した幕府としての空前の処置は、前者であるが、その効果には幕府の国策の執行にとって益するところは殆どなかった。またトクガワ家の直参武士に対する方策とても、それを新しい国策に順応させるには、概していうと彼等の道徳的心情と、その生活に対する或る程度の安定感と、また一種の名誉心とに、委する外はなかったが、幸いにこの点では幕府の苦心がほぼ酬いられた。上に記した新国策の実現としての種々の事業の企画もその遂行も、みな直参武士から選任せられた諸有司によってなされたのである。けれども封建諸侯の家臣については、少数の例外を除いては、幕府の如何ともする能わざるところであった。要するに、幕府はその新国策を実現するに当り、封建諸侯の存在と武士というものの政治的・社会的な地位とによって未曾有の困難に遭遇せざるを得なかったのである。

二

日本の政府たる幕府は、列国と種々の交渉を重ねることによって、次第に世界の形勢を知り、そうし

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

てそれによって日本の国家の使命と日本の政府の責務とを覚ってきたので、そのために旧来の因襲を放棄し去って新たに世界に対する日本の国策を立て、またそれに伴って封建諸侯の思想的統一と直参武士の生活の変改とを企図したことは、上にいったとおりである。ところが、儒学思想または神道思想によってその知見を養われてきた当時の知識人の中の一群は、これに反して現実の世界の形勢には眼を塞ぎ、徒らに列国をもって我が「神州」に危害を加えるものと信じ、一面ではそれに対していわれなき恐怖心を懐くと共に、他面では武備をすることが手がるにでき、従って「夷狄」を撃攘することが容易であるように思い、幕府の明識ある閣僚とそれを翼賛した諸有司とのなみなみならぬ努力と、日本をして初めて一応の国際的地位を占めるを得しめたその大なる功績とを、認めようとせず、かえって外夷の脅嚇（きょうかく）に屈服したものとしてひたすらにそれを非難し、締結せられた条約の破棄を主張するに至った。

のみならず、彼等はこれらの主張を、これまで中外共に認めていた日本の政府としての幕府の地位を否認する思想にまで発展させてゆくことによって、日本の政治形態の問題、政権の所在の問題、に転化させ、長い間政府と全く分離していて政治の上に超然たる地位にあった宮廷を、政治の世界にひき下ろした。宮廷には政治に参与するだけの人物も無く機関も無いのに、急にこういう地位に置かれたために、それは結局、当時志士とか浪人とかいわれていたこれらの一部の知識人の左右するところとなり、彼等によって惹き起される政治上の紛乱に捲きこまれることになった。勅諚とか叡慮とかいう名によって宮廷から発表せられる声明が実は彼等の意向であって、政治上の紛乱はそれによって生ずるのであった。幕府の大老の地位に就いたイイ（井伊）の行動も実はそれにひきずられたのであって、彼がアベやホッタによって定められた新国策を継承しまたは推進するよりも、トクガワ家の権力の維持を根幹とす

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

る幕府の旧方針を守ってゆくことに重点を置いたのでも、それは知られる。彼のこの態度はいわゆる志士や浪人の運動を抑圧する点においてそれとは正反対のように見え、事実その間に激しい衝突が起ったが、それは政権の所在を幕府とするか宮廷とするかの違いから来たことであって、問題の中心点はどこまでも国内における政権の所在であった。

かかる運動を行った志士や浪人の間には、一方では全国的に種々の連絡が作られ、諸侯の家臣にも脱藩して彼等の群に投ずるものが多かったが、脱藩者も実は主家との関係を持続していて武士としての地位と生活とを失わないのがむしろ彼等の常状であり、それによって封建諸侯の勢力の存在が示されていると共に、他方では、彼等はもはや知識人とはいわれない暴徒と化し、暗殺劫略、凶悪の限りをつくして世の秩序を破壊しながら、政権の根本を動かすような行動をとろうとするばあいには、やはり有力な諸侯及びその家臣の力によらねばならなかった。そこで彼等は宮廷内の勢力とかかる諸侯またはその家臣とを連結させることをつとめた。ところが、諸侯をしてかかる活動をさせることは、おのずから戦国割拠の形勢を誘致するので、それは彼等の間の思想的統一を求めることによって国家の結合を固めようとする幕府の新国策とは一致しないし、またそれが宮廷内の勢力と連結せられると、それは単に思想の上においてのみではなく、実行運動として日本の政府としての幕府を倒壊せんとするようになってゆく。ただ宮廷人のうちでも意見は必ずしも一致せず、有力な諸侯とてもまた同様であるから、かかる実行運動は容易には実現せられず、特に従来叡慮の名によって声明せられていたことは、志士や浪人の煽動に本づいた一部の宮廷人の意向であって、真の叡慮ではなかったことが、一般に推測せられているのみならず、その一部分は主上御自身によっても明かにせられ、京都の守護職アイズ（会津）侯の手に

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

よって行われたクーデタによって、かかる宮廷人とそれを支持したチョウシュウ（長州）侯との勢力は、宮廷から一掃せられた。名を叡慮にかり勅諚にかりておのれらの主張を宣伝し、それによって宮廷を政治上の紛争に捲きこもうとした、一部の宮廷人やその煽動者たる志士や浪人やその支持者たる有力な諸侯の、悪辣な運動は、かくして一たび挫折したが、彼等がほしいままに勅諚の名を利用したことは、日本の国家の進展のために新国策を行おうとする幕府の行動を抑制もしくは妨害したのみならず、今日から見れば、政治上の重大なる責任を皇室に帰したことになるが、当時においても識者のうちにはそのことに思慮の及んだものがあった。さてこのクーデタと前後して、チョウシュウの行った外艦砲撃の失敗とイギリスの艦隊の来攻によるサツマ（薩摩）の敗戦とは、勅諚の名叡慮の名によってしばしば声明せられた攘夷が実行すべからざる空想であることを、志士や浪人の徒にも有力な諸侯にも覚らせると共に、外夷は必ずしも「神州」を窺窬（きゆ）するものでないこと、日本は進んで列国と親好しなければならぬことを、彼等に感知させた。

しかし志士や浪人の徒の幕府倒壊の計画は消滅せず、チョウシュウ侯の勢力はそれがために宮廷の武力的占領を企てるに至った。この計画もまた失敗に帰したが、幕府の一部にはこの機会においてトクガワ氏の権力の確立を根幹とする伝統的の政策を強行しようとする意向をもつものも生じた。けれども時勢の動きは必ずしもそれに便ならざるものがあったので、サツマを主とする有力な諸侯は、一方では列侯会議を設けて幕府を牽制せんとしたが、外交上では諸侯が列国と各（おのおの）別に条約を締結する権能をもつべきだという主張が、サツマの家臣の間に生じていたし、勅命の名をかりて外艦を砲撃しながらそれが失敗するや忽（たちま）ち外艦に降伏して一種の平和条約ともいうべきものを締結したチョウシュウの行動も、そ

SAMPLE
Shosha-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

れと通ずるところのあるものであった。サツマ人のこの主張の裏面には、列国と親和することは必要だが、勅諚を奉ぜずして幕府が締結した条約は無効であるという考えがあるので、そこに攘夷論から継承せられたところがある。この思想は現実の情勢としては戦国割拠の状態の復活を来たすことになるので、そこにはまた日本の政府としての幕府の存立を否認し、日本の国家の統一を破壊せんとする思想が伏在する。フランスの万国博覧会におけるサツマの行動は、この主張の実行に移されたものと解し得られよう。諸侯会議によって国政を処理せんとするのとこれとは、矛盾するもののようであるが、諸侯会議とても実は四、五の有力諸侯がそれぞれ自己の勢力を伸張しようとすること、もしくは諸侯の一人がその主導権を握ろうとすること、に外ならず、そうしてその根柢には幕府否認の思想が存在するから、この二つは、形を異にして精神を同じくするものなのである。サツマとチョウシュウとの聯合はかかる形勢の間に行われ、そうして宮廷の内部に起った新勢力がそれと結びつくに至って、いわゆる王政復古・幕府征討の計画がせられたのである。この計画はかつてチョウシュウの勢力が一たび企てて成功しなかった宮廷の武力占領と、その力により勅命の名をかりた宣伝もしくは声明を行うこととによって、成立したものであるが、勅命をかりるのは、前々からいわゆる志士や浪人の煽動によって一部の宮廷人の行ってきたところを踏襲したものである。ただこの時には前主上の崩御が有力な機会となったことが、ほぼ推知せられる。しかしここで注意せられるのは、かねてから勅諚または叡慮として宮廷人によって宣伝せられた「攘夷」が、幕府の締結した条約の勅許という形において全く否定せられたことであって、これは名を勅命にかりることが精神的にその権威を失ったという重大な事実の生じたことを示すものである。かかる明白なる事実が示されたにかかわらず、王政復古・トクガワ氏の征討を同じく勅

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

命の名をかりることによって行おうとしたのが、一部の宮廷人やいわゆる薩長の意図であった。しかし実はそれよりも、薩長の軍事活動がフシミ（伏見）・トバ（鳥羽）の戦争において勝利を得たことの方が、重要である。この戦争が薩長にとっては、昔のトクガワ氏におけるセキガハラ（関ヶ原）もしくはオオサカ（大坂）の役のはたらきをしたのである。諸侯の多数は結局勢力の強いものになびいたに過ぎないからである。チョウシュウの勢力がかつて宮廷人を使嗾して勅命の名をかり用い、それによって幕府倒壊の運動を起しながら、それが失敗したのに、いま薩長の聯合勢力が同じことをして成功したのは、このことを証するものでなくて、何であろうぞ。

アベやホッタの指導下にあった日本の政府としての幕府が、日本に国際的地位を得させようとして定めた新しい国策は、種々の紛乱を経た後、条約勅許の名において公式に承認せられ、明治の政府もそれを継承するようになってゆくのであるが、封建諸侯の存在と、その諸侯の家臣たる武士及びそれと共に暴悪の限りをつくして国家の秩序を壊乱させた志士輩浪人輩の行動とは、事実において戦国割拠の形勢の復活となって現われ、日本の国家の政治的統一はそれによって破られた。これが幕府の国策を妨害し攪乱しようとした反動勢力の活動であったのである。

三

対外問題が起ってから、幕府は当時の世界の情勢に対応して、日本の国家の使命を新たに認識すると共に、日本の政府としての幕府の責務を自覚し、それに本づいて開国の新国策を決定し、そうしてその実現に努力したが、一方ではそれに対する反動勢力が生じ、志士とか浪人とかいわれたものの幾群かと、

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

それと何等かの形で何等かの関係をもっている諸藩士と、並びにそれに動かされている一部の宮廷人とによって、それが形成せられ、そうして彼等は種々の陰険なる権謀術数を弄することにより、または暴力をもって治安を攪乱することによって、断えず幕府の新国策の実行を妨害した。これがこれまでいってきたところの大要であるが、ここで少しくそれを補足しておきたいことがある。その第一は、反動勢力という語を用いたことであるが、これは幕府の国策が現実の情勢に対応して日本の国家の進んでゆくべき針路を見定め、それがために幕府の従来の政治を根本的に改めることによって成立したものであるとは反対に、現実を無視した空疎な臆断と一種の狂信とによって、この国策を破壊せんとするものであったからである。知識人の間に歴史的感覚の発達していなかった当時においては、かかる称呼は用いられなかったけれども、事実としてそれが反動勢力であったことは明かである。（「反動」という観念そのものが本来歴史的感覚から生まれたものであるが、世を古の状態にたちもどらせることができるとせられ、または一たび列国と通交を開きながら、それの開かれない前の状態に復帰することができるように、思われていたのでも知られる如く、このころの知識人には、そういう歴史的感覚はなかったのである。）

次には、反動勢力の活動の主なるものであった鎖国または攘夷の主張や行動は、上にいった如く全く敗亡し、幕府の開国の国策及びその国策の実現としての諸施設が、一般に公認せられたが、反動勢力の活動としてはなお依然として行われているものがあった、ということである。それは封建の制度の上に立ち、そうしてそれを悪用し、戦国割拠の状態を再現することによって日本の国家を分裂に導き、また武士の制度の変態的現象ともいうべき暴徒化した志士や浪人の徒が日本の政治を攪乱し日本の社会を

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

無秩序にすることによって、究極にはトクガワ氏の幕府の倒壊を誘致し、もしくは二、三の藩侯の力によってそれを急速に実現しようとしたことである。反動勢力の行動の根柢には幕府倒壊の欲求の潜在していたことが、種々の資料によっても、またそれより前のいわゆる勤王論者の主張によっても、知られるが、初期のうちはそれがまだ、反動勢力の主動者・参加者みずからにおいても、多くは明かに意識せられなかった。然るに安政の末年からはそれがかなり明かにせられ、それから後には次第にその傾向が強められてきた。当時の時勢の動きは、幕府の国策とその実現とを除いて考えると、何等かの明確な思想が一世の指導精神となって、それが種々の困難を克服しつつ次第に実現せられてゆく、というようなものではなく、人によって互いに齟齬したり矛盾したりしている雑多の、また時によって変動常なき、いわば場あたりの思いつきと軽浮な行動欲とのおのずから重なりあいはたらきあいまたは排撃しあうところから、知らぬまに或る勢いが生じて、その勢いみずからが盲目的に動いてきたものに外ならぬ。反動勢力といったのもかかる動きを概観してのことであって、その活動に参加したものまたは或る時期或るばあいに主動者となったものとても、初めから一定の目的をもっていてその実現のために奮闘努力したのではなく、勢いに駆られて奔馳してきたに過ぎない。ただ幕府倒壊の方向だけについていうと、ほぼ上記の如き情勢となったのである。

　ところが、こうなってからの反動勢力の主張は、幕府の政治・幕府の外交がよくないというのではなくして、幕府が政治をすること外交をすることがよくない、即ち幕府というものの存在することがよくない、という考えであった。彼等が幕府を非難するに当り、具体的に事実を挙げるよりも、国民を塗炭の苦に陥れたとか、幕吏に奸徒が多く正義が地に落ちたとか、国家傾覆して戎夷の管治をうける日が遠

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

くないとか、いうような、甚だしく誇張せられたことばで抽象的ないいかたをすることに重きを置いたのも、これがためである（文久二年の詔勅の語、慶応三年のトクガワ氏討伐の密勅のもほぼ同様）。これは、武家が政権を握ったために皇室の権が衰えた、頼朝以来の将軍は皇室の逆臣だ、という、歴史的事実を無視した勤王論者のほしいままな臆断に由来があるが、こういう考えかたからいうと、攘夷や鎖国の主張は敗亡しても、幕府倒壊の主張は無くならないのが、自然である。鎖国思想・攘夷思想の敗亡したのは、幕府の定めた開国の国策が日本の国家の前途のために必要と認められたからであるが、従来志士や宮廷人によって宣伝せられていた如く、攘夷や鎖国が叡慮であり勅諚の示すところであったならば、これはかかる叡慮なり勅諚なりが日本の国家のために不利なものであったこと、従ってそれをそのままに遵奉しなかった幕府の処置は、叡慮勅諚に背くことによってこの不利を避け得たこと、少なくともそれを軽減したこと、を明かにしたものといわねばならぬ。しかし反動勢力に属するものは、そういうことを少しも考えなかった。もっとも既に述べた如く勅諚といっても叡慮といっても実は反動勢力の主動者たる志士や宮廷人の意向の仮託せられたものであったから、これもまた自然のことであろう。ただ開国の国策が公認せられた後となってはいうまでもなく、それより前とても現実の情勢と事態とを見るだけの明識のあるものからいえば、彼等がかかる仮託をしたことは、主上が不明であられた如く世上に宣伝したことになるので、その点でも彼等の罪は甚だ大であるが、このことをもまた彼等は考えようとしなかった。それだけの良心のはたらきが彼等にはなかったのである。のみならず、主上を欺瞞して京畿の外に鳳輦を移そうとしたことさえあっても、彼等は幕府を倒すためにはそれを当然の企図または行動と考えていた。それはあたかも彼等が人を殺しても世を欺しても幕府を倒すためには当然のことだ

SAMPLE
Shoshin-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

と思っていたのと同じである。そうしてそれから後になっても、同じく勅命に名をかりまた宮廷及び京師の武力的占領を行って討幕の兵を起し、またしても幼沖の主上の京外移御をさえ計画したのである。

これらの事実は、トバ・フシミのトクガワ勢の敗戦の後に東帰した前将軍のいわゆる「恭順」が、実はかかる反動勢力のほしいままに朝廷の名を利用した陰険な権謀と隠密の間に準備せられた武力との前に屈服したものであることを、示すものに外ならぬ。討幕の密勅のことは前将軍は知らなかったであろうが、薩長の徒が錦旗をかざして幕兵を圧し前将軍に賊名を負わせたことは、知っていたに違いない。その直前に、当時の事態をサツマ人の陰謀から出たものとし、その罪を数えて上奏しようとしたのとは、あまりにも甚だしい態度の変りようである。それは敗戦の時から諸侯の多くが次第に薩長政府に追従していったのと、その形迹（けいせき）において同じであった。

世に喧伝せられているカツ・アワの行動は、かかる際に行われたものである。

四

カツがナガサキ（長崎）でオランダの教師から海軍のことを伝習した最初の学生のうちで成績の優れていたものであったことは、アメリカに派遣せられた咸臨丸の艦長に任ぜられたことでもわかるが、その後文久二年には当時エド（江戸）にあった軍艦操練所の頭取となり、また軍艦奉行並という地位に上った。しかし彼は純粋なる海軍軍人として軍務に当ったのではなく、時事について断えず幕府の当局者に建言をしたり、知名の人々と意見を交換したりして、種々の方面に活動した。そのうちで最も注意せられるのは、文久三年から翌元治元年にかけオオサカ湾防備の施設に関する任務を帯びてコウベ（神

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

戸）に滞在したとき、その地に海軍の学校を設けると共に、一方では宮廷人の力をかり他方ではいわゆる志士輩とも連絡をとって、日本の海軍拡張の計画を立て、みずからそれを実行しようとしたことである。この学校は、その開設を許可した幕府の文書を見ると、カツの私塾のようであって、やや不明瞭ながらその塾に入ったものをカツが門生と称していたらしく思われることからも、そう解せられるが、しかし幕府がその経費として一定の金額を支給し、また教授操練のために幕府の艦船を用い海軍士官を教官として依嘱することを許してもいたから、純然たる私塾ではなかった。エドの官立海軍操練所の頭取であるカツが性質の曖昧なかかる私塾を設けたのは、今日の考えかたからは解しがたいことである。その塾生として当時志士とか浪人とか称せられているものをさえ収容し、海軍歴史に載せてあるカツの手記によれば、むしろそういう徒輩を収容することが学校設立の主要なる目的であったように見えるのも、また奇異に感ぜられることであって、厳格なる規律と精緻なる科学的知識との要求せられる海軍軍人が、かかる私塾によって養成し得られるかどうか、大なる疑問である。なお海軍の拡張の如きは当然日本の政府たる幕府の任務であるのに、それを政府に何の地位をもたないカツが、意見として主張したり建議したりするのではなく、みずからそれを実行しようとし、しかもそれを、或は宮廷人の力をかりていわゆる朝命によろうとし、或は反動勢力の主動者たる志士輩浪人輩と謀議するに至っては、決して正当な態度とはいわれなかろう。このばあいカツは、宮廷が海軍拡張の如き国政上の重大な問題について何ほどの権威ある判断をなし得ると思ったのか、また宮廷がそういうことに容喙（ようかい）もしくは関与することを是認していたのか、なお志士輩浪人輩の平素の主張や行動をどう考えて彼等とかかることを謀議したのか。またその企画というのが、海軍の兵営をコウベとツシマ（対馬）とに置き、次に朝鮮に、更

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

に進んでシナに置き、朝鮮・シナをして我が国と協同して共に海軍を振興させよう、というものであって、事は実は一国の国策に関することであるから、なおさらである。ツシマ及び朝鮮に対するカツの関心は最も深かったらしく、特に後者に対する企画を「征韓」と称してしばしば筆にもし人に語ってもいる。（この「征韓」という語は、上記の目的で朝鮮を誘導すること、またはそれについて朝鮮と交渉すること、であろうと推測せられる。）こういう企画は、前年ロシアの艦船がツシマにおいて不法な行動をしたことに刺戟せられて、カツの念頭に浮かんだもののようであって、その点は理解せられるが、朝鮮・シナに関する企画そのものは極めて茫漠たるもの何等具体性の無いものであり、当時の情勢において実現のできない空想に過ぎないものであることは、いうまでもない。そうしてかかる海軍拡張論がかの海軍の学校の設立とからみあっていたのである。幕府が元治元年の末に学校を閉鎖させ、カツの任を解いて帰府謹慎を命じたのは、当然の処置であるように今日からは考えられる。カツはその日記において、それを邦家のために尽くした至誠が俗吏のために壅塞せられたものとして、憤懣しているが、彼が幕府の当局者を俗吏とか小吏とか小人とか奸物とかいって罵倒するのは、その日記に頻出累見、数うるに遑なきほどである。

おのれらの党派に属せずして意見や行動を異にするものを奸物と称してそれを排撃することは、シナの知識人官僚などの党争において往々見るところであり、我が邦でも学問が盛んであるといわれていたミト（水戸）にその著しい例があるが、このころの志士浪人輩にもまたそれがあるのみならず、いわゆる奸物をほしいままに殺戮してそれを誇るのが彼等の常習であって、有名無名の士人でその禍に罹ったものは甚だ多い。浪人ではないがかのサツマのサイゴウ（西郷）の如きも、チョウシュウの奸物（その

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

実は公正達識の士）をその国人に暗殺させるといったことがある。志士浪人の集団的行動でかかる殺戮を企てまたは行ったばあいの多いことは、いうまでもないが、これはヨシダ・ショウイン（吉田松陰）が半ば空想的ながら既に思いついていたことであり、上記のサイゴウにもそれがあった。こういう奸物よばわりとそれに伴う凶悪の行為とは、多くは、彼等志士浪人の間に行われた虚伝または彼等の捏造した浮説を、自己の好むところ党するところに従って軽信し、何ごとに対しても真実をただそうとする用意の無いことと、殺伐な彼等の気風と一種の虚栄心と、彼等の他に対する猜疑心や自己の弱小感と、一方ではそういう感じをもちながら、自己が一たび手を挙げれば事は忽ち成り天下は忽ち動くと思う誇大妄想的な行動欲と、などから出たことである。流言蜚語の乱れ飛ぶことは、通信の不便であり報道機関の無かった当時においては自然のことでもあるが、世の情勢を判断する識見のあるものは、少なくともそれに疑いを抱いて信否の判断を後日に保留するのに、志士輩にはそれができず、そうしてかかる流言蜚語によってすぐに軽率な行動を起すのである。

さてカツはその日記において幕府の当局者を断えず罵倒しているが、それにどれだけの確実な根拠があったのか。当時の勘定奉行オグリ（小栗）を大邪といっているのはフランスから金を借りようとしたためのようであるが、起債を外国においてするのはヨーロッパの一般の例であるから、カツがその方策に賛成しないならばそれは意見の違いであって、オグリの人物を邪とする理由にはならぬ。その見るところが狭小で天下の大勢に通じないともいっているが、これもまた同様であって、人によっては、オグリの遠大の識見と有為の気象とトクガワ氏に対して懐いていた熱情とを、讃美している。この方が彼の経歴と功績とから見て当っているようである。チョウシュウ再征の役に関してオガサワラ（小笠原）閣

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

老を奸物といい、それに従うものは狎邪（こうじゃ）の小人であるといい、総じて彼等を国家をあやまる童稚輩と罵るが如きは、一つはその戦功が挙がらないためでもあろうが、難事に当って努力している彼の苦衷にいささかの同情をも寄せようとしないものではある。既に文久三年の彼の上京に際しても、大義に暗く奸者の企てに従って失敗を招いたのではないかと評しているが、いわゆる奸者が何人であるかは明かでないものの、もし彼の帷幕に参したミズノ（水野）やイノウエ（井上）やムコウヤマ（向山）などを指しているならば、それはいうまでもなく、妄人の妄言である。カツは別のばあいにも、オグリと共にミズノを評して大言して算なく空議因循といっているが、これほど彼を見あやまった評はあるまい。幕府の官僚には、俗吏もあったろうし小人も無かったのではあるまい。そのしごとには因循姑息なことも少なくなかったであろう。けれども、言路を塞ぎ賄賂を貪り阿諛諂佞なもののみが登用せられる、とカツがしばしば概評しているのに、どれだけの真実があるかは、ここに挙げた一、二の例によってもほぼ類測せられるのではあるまいか。総じてカツは世上の事態を見る目が甚だ偏僻であって、いわゆるミブ（壬生）浪士（新撰組）に兇行をはたらくものがあるために、京都守護職の任にあったアイズ侯を非難していながら、いわゆる志士浪人の徒にはこの点において彼等よりも甚だしいものが多いにもかかわらず、その志士浪人の支柱となっているチョウシュウ侯の責任を問わないでいるのも、またフランス人に依頼しているというのでオグリやクリモト（栗本）を非難しながら、イギリス人と何等かの連絡をもっているサツマ人の行動にはむしろ同情的の意見を述べているばあいのあるのも、その例である。幕府の要路にいるものを上記の如く罵りながら、文久三年にキョウト（京都）におけるチョウシュウの勢力が浪人輩と共に宮廷を圧迫して事を起そうとし、かえって宮廷から排斥せられた後、この事件についてはチョ

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

ウシュウ人の罪の大なることが明白であるにかかわらず世間ではチョウシュウの非をのみ責めるが是なるところを見なくてはならぬといい、再征の役のゆき悩んでいる慶応二年にも、長人のいうところ悉く大節を持し我が小吏の肯肯にあたると讃美しているし、同じ年、倒幕のための薩長聯合が既に成立していることをほぼ知っていながら、何ぞ区々として薩長を悪まんと閣老にいっている（これは解難録及び開国起源による）。カツは上に述べた如くコウベ滞在の時から志士輩浪人輩や薩長人に接触していて、彼等に対しおのずから親近の情をもっていたように推測せられるから、こういう見解も心理的にそれと何ほどかの関聯があったのではなかろうか。もしそうとすれば、彼の胸裡にも志士浪人の徒と同じような心理がはたらいて、そこからかの奸物よばわりも生じたのではあるまいか。こう考えると、カツが慶応二年に或る閣老に対し、今日幕府のとるべき第一の処置は、狎邪の小人三四輩を戮して天下に謝することであると、進言しているのも、またそれと無関係ではあるまい。ここで「戮する」というのは多分刑罰として死に処することをいったものであろうが、カツが小人と称したものを死に処せよというところに、やはり志士輩の言動と通ずるものがある。幕府の当局者を奸吏と称し、そうしてそれらを誅せよというのは、彼等の従来の主張だからである。なおこのころには諸藩においても、党派の争いから権勢を得たものが反対党のものを君命の名によって死に処することがしばしばあっていて、それは前々から往々行われていることではあるものの、やはり志士輩浪人輩の行動に通ずるところのあるものであることを思うべきである。

カツはまた当局者の嫌疑を受けていること、俗吏・小人の妨げによってわが言の用いられざることを、殆ど病的と思われるほどに断えず訴えているが、その反面では幕府が自分の意見を用いてくれたな

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

らばそれによって何ごとでもできたかのように自負することもあり、現にチョウシュウ再征の役の停滞していた時、自分に任せてくれるならば四、五十日を出でずして事件を解決する、と揚言したほどである。かの「征韓」による海軍拡張論もまたその類である。特に彼は同僚などと虚心に合議するを好まず、他人のいうところはみな取るに足らずとして独りみずから用いようとする癖があるので、このことは日記にもしばしば記されているが、それはうらをかえせば人を評して阿諛迎合の徒を好むという非難ともなる。カツは自己の言に聴従するものをば口を極めて称揚するのが常である。そうしてこういうこともまた党派心・虚栄心の強い志士輩浪人輩の心理と縁の無いものではあるまい。ことがらはやや違うが、カツが往々一片の赤心は失わないとか一死以て君恩に報ずとか、または俗吏が局に当るがために国家将に瓦解せんとすとか、いうようなことを軽々しくいっているのも、彼等の口吻に似ていることが感ぜられる。

以上は概ねカツの日記によったものであるが、日記に記されている彼の意見には、そのばあいばあいでの思いつきに過ぎないものもあり、従って時には互いに齟齬しまたは矛盾したことも見えるので、薩長や浪人輩に関する批評にもそれがあるから、上に述べたことがカツの心術の全貌を示すものとは必ずしもいいがたいが、しかし反覆して同じようなことの記されているもの、当局者に対する建言や開国起源などの著書のうちに見えるのと同じものなどは、彼の人物と性癖とを示すものと解すべきであろう。ここには一々それをいうには及ぶまいが、ただ概観すると、彼は反幕府の思想が宮廷人や薩長人には歴史的由来の遠いもの、または封建制度の根本にかかわるものであることを考えずして、それを一に当時の幕府当局者の無能または奸邪の責とし、また幕府の外政に姑息なところのあることには多くの因子が

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

あって、その主なるものは外政を妨害し攪乱した反動勢力の活動であることを思わずして、やはりひとえに幕府の当局者のみを非難し、そうしてしきりに奸吏の事を用いるをいうのが、その態度である。言うこといよいよ多くしてその効果のますます少ないのは、むしろ当然ではあるまいか。彼は実に多言多弁である。しかし彼の世に遺した事業、日本の国運に寄与した功績が、どれだけあったのか。幕末十余年の間に、幕府の新国策の樹立とその実現とに大なる貢献をしたナガイ（永井）・キムラ（木村）・ミズノ・イワセ（岩瀬）イノウエ・オグリなどの業績に追従し得るほどの、建設的な基礎的な、また着実な、しごとを彼はどれだけしたであろうか。一たび任を解かれ謹慎を命ぜられた後にも、例えばチョウシュウに対する工作のために西国に派遣せられた如く、特に起用せられたこともあって、それは彼とチョウシュウ人との従来の関係が考慮せられたのと、彼の才能が当局者に認められたのとのためであろうが、そのとき彼のしたことが大局の上に何ほどの効果があったであろうか。

五

ここまでいってきて明治元年のカツの行動にたち帰るべきであるが、これは一般に知れわたっていることであるから、ここではただその補遺として彼の人物を知るに足るべき一、二の資料を、日記から拾い出すにとどめよう。

カツはこのばあいの幕府の態度として、薩長の所為の如何によっては兵を上方に出してそれと抗戦すべきだといったこともあるが、後にはどこまでも前将軍の「恭順」の意を奉ずべきであるとして、兵を動かすを非とするに至った。幕軍の抗戦によって国内の争乱が誘致せられ、そうしてそれはおのずから

SAMPLE
Shosh-Shinsui.com